妹が『小説家になろう』で小説家になるようです

裏海江田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妹が『小説家になろう』で小説家になるようです

【Ｎコード】
Ｎ５２２４Ｙ

【作者名】
裏海江田

【あらすじ】
ある日、ケータイ小説に感銘を受けたどこにでもいる様な女子高生の妹が、小説家志望の兄から小説家になろうで小説を書くための『いろは』を学んで行くのだが――

妹様が小説に興味を持ち始めた様です（前書き）

小説家になろうの歩き方
をコンセプトに考えた作品です。

基本的に小説を書く上での知識は別として
（そのようなものは作者にも備わっておりません）
小説家になろう（以下：なろう）で出来る事、やってはいけないこと等を取り上げ、それをお話にしていこうかと考えております。

文章ですが、あくまで歩き方である為、会話文のみの構成で作らせて頂こうかと考えてます。
決して作者の文章力が拙い訳ではありませんので、あらかじめご了承下さい。
…ほんとだよ？

また、会話文だけの表現に限界を感じたりご意見ご要望がございましたら、可能な限り構成を見直させて頂きますのでよろしければどうぞ。

妹様が小説に興味を持ち始めた様です

「ドカーン。お兄ちゃん、妹様が参上したよっ！」

「いや、階段をドタドタ駆け上がってきて、俺の部屋のドアを乱雑に開け放った上にそんなこと言われてもな。何？何の用なの？俺、何かピンチだった訳？」

「あのね、お兄。私感動しちゃったの」

「いや、俺の質問に答える事無く人の座布団を占領した挙句、人の手を両手で万力の如く握りつぶしながら潤んだ目で言われてもな。っていうか痛い痛い！」

「もぅ、世界が３６０度変わっちゃうくらい感動したの」

「いや、お前人の話を聞け。いや、聞いて下さい。痛い上に、一周してるからっ」

「あ、ごめんね兄貴。私、感動しちゃってさ」

「うん、まずは俺の呼び方を統一しような。な？」

「でね、お兄ちゃん。何で私がこんなにも感動してるかっていうとね？」

「わぉ、一周した上にやっぱり話聞かないんだな、俺の妹は」

「さっきね、本屋にね、本を買いにいったの。それでね、何となく

新書コーナーに足が向いちゃってね？」

「お前、頭悪い喋り方やめろ。いい加減高校一年生なんだから主語・述語・修飾語とか、考えろ」

「わかったわよ。でも、お兄も頭悪いじゃん。私、保健体育は成績良いんだからね」

「保健体育で威張られてもな。それに、俺は文系専攻だから理数が少し悪くても良いの。文系大学生の特権」

「それで、最近人気の小説って何かなぁ～って見てたんだけど、一冊だけ凄く興味を惹かれる本があったの」

「俺はもう何も突っ込まない事にするよ。それって小説？」

「細かい事言う人は嫌われるよ？でね、すっごく面白かったの。その小説が」

「お前の文法は本当にどうかしてるぜ。むしろ清々しいな」

「でね、読み終わった後に気づいたんだけれど、ケータイ小説なんだって。その小説」

「立ち読みで全部読みきったのか。とんだ迷惑女子高生だな。気をつけろ、今度から店員にマークされるぞ。と言うか、何その倒置法の連打。流行ってるの？」

「でね、私その小説に凄く感動しちゃって、私もこんな風に人を感動させられる小説が書けたらなって思ったの」

「へぇ、日本語に不十分しているお前が日本語書けるのかどうかは置いといて、そんなに面白かったのか」

「兄貴って、確か小説とか文章書くの得意じゃん。ついでにパソコンとかも」

「まぁ、一応プロ目指してるからな。まだまだアマチュアですが、出版社に持ち込みさせて頂いてます。で、何だ。色々教えろと」

「そうそう。っていうかお兄ちゃんってそんなことまでやってたんだ。意外とカッコいいね」

「俺はいつだってカッコいいんだよ。ふむ、成程な。今まであまり気にしなかったけれど、お前の言葉遣いは目に余るものがあるしな。よかろう、お前に小説のいろはを教授してやろう」

「アマチュアのくせに偉そうだね。よろしく、セ・ン・セ・イ」

「まぁ、確かにまだまだひよっ子だから偉そうな事は言えないかな。そして、科を作るな気持ち悪い」

「何よ、せっかく可愛く綺麗で美人な妹が言ってるのに」

「俺的には、可愛いと綺麗は同一にはならない気がするんだがな。可愛いかどうかは別として。よし、じゃあちょっと待ってろ」

「あれ、お兄なんで本棚から分厚い本とか原稿用紙取り出してんの」

「え、だってお前小説書きたいんだろ。まずは色々読め。広辞苑で意味を調べながらな。それから感想文書いて、また読んで感想文書いてまた読んで。基本だろ、あくまで俺のやり方だけれどな」

「ちーがーうーの。私は、もっと楽して手軽に書きたいの。アナログなんてヤなの」

「お前、今の一言で全世界の小説家及び小説を目指している方々を敵に回したぞ。俺を含めて。そして、俺のお気に入りの座布団の上で地団駄踏むな」

「いいじゃん、別に。なんなら、兄貴の男っぽくないピンクのベッドの上で跳ねちゃうもん。留守の間に」

「いいだろ、男がピンク好きでも。後、何なのその脅迫。地味に嫌なんですけど。ああ、ベッドに乗るなっ！わかったから！」

「じゃあ」

「はいはい、つまりパソコンか携帯で書きたいんだな？っていうか、携帯持っているんだから自分で携帯で書けばいいじゃん」

「え、だってどこで何をどうしたら、私の書いた小説を読んでもらえるのか分かんないんだもん。教えてよ」

「ああ、成程な。自分で調べようとしないお馬鹿さんだったな、お前は。なら、俺のパソコン貸してやるからそれでやれ。その方が文章の間違いとかに気づきやすいし、添削も楽だ。何よりキーボード

で打つのに慣れたら携帯より早い。小説は、小説専用の投稿サイトがあるからそこに投稿すりゃいい」

「なるほどー、分かった。お兄ちゃん、さっそくパソコン点けていい？」

「とか言いながら点けてんじゃん。人の机占領してんじゃん」

「硬いこと言わな～い。そんなんじゃ女性にモテない上にハゲるよ、顔はまだ悪くないんだから。それで、どうやってそのサイトに行くの？」

「俺がハゲる事があれば、それは確実にお前の所為だな。で、まずＩＥかＦｉｒｅＦｏｘを開け。青いｅのアイコンかオレンジっぽいヤツ」

「ほいほい。マウスも女の子っぽいピンクな上に小さいね。何？可愛いアピール？」

「黙れ、喋るな、追い出すぞ」

「ん、何これ。ごぉｇ」

「グーグル。で、このテキストボックスに『小説家になろう』って打ってみ」

「あれ、小説サイトを教えてくれるんじゃなかったの？何で目標系なの。話が違うよ」

「お前な、教えてもらう立場のクセに人の腕抓るんじゃない。まあ、

とりあえず打ち込んでみ」

「ねぇ兄貴」

「なんだ、固まって」

「文字ってどうやって打つの？」

「マジかっ」

妹様が小説に興味を持ち始めた様です（後書き）

お疲れさまです
やっぱり文章力は拙かった裏海江田でございます。
ここまで嘆かずお読み下さいまして誠にありがとうございます。

第一話ですが、なろうの歩き方と偉そうに語っている割には、まだシューズを履くどころかお布団の中から抜け出せてもおりませんね。
はい、無駄な会話が多い為ですね、すみません。

次回から妹様により小説家になろうへアクセスして頂ける手筈となっておりますので、よろしければ次話も拝読して頂けましたらありがたいです。

更新期間と致しましては、非常にスローモーでマイペースなヒューマンですので、気長に――それこそ忘れるくらいに思って頂けても申し分ございません、はい。

それでは、前書き・後書きと合わせて長文失礼致しました。

追記　１１月１５日
誤字修正致しました。
パソコン点ける　の件ですが、修正前はパソコン着ける　になっておりました。
新しいファッションとして便利で良いと思うんですけれどね、思いませんね。
申し訳ございませんでした。

世紀末妹様あらわる（前書き）

前書き・後書きが長い事で有名な裏海江田です。

嘘です。有名ではないです。
前回、小説家になりたい。と喚く妹様に『小説家になろう』を教えてあげた兄様。しかし、妹様はパソコンと言う物に触れる機会が少なかった為、タイピングができませんでした。
そこで、兄様による熾烈なタイピング講習が始まったのであった・・・！！

本編はその後の話。
そしてその件に触れ忘れております。

その為、前書きで触れればいいか　と言う一種の甘えが生じております。
ご容赦下さいませ

世紀末妹様あらわる

「――で、検索結果の一番上にある『小説家になろう』をクリック」

「ほい、クリック。・・・・クリックって、何かいやらしい単語だよね」

「もう二十年も人間やらせてもらっているが、そんなことを言う人間に出会ったのはお前が最初で最後だと思うよ」

「やったね、ラストウーマンだね、稀少価値だね」

「・・・・で、画面変わったか？」

「あ、うん。ここが小説家になろおってサイト？何か文字ばっかで面倒くさそうだね。もっとこう・・・・デコらないのかな」

「いきなりディスってんじゃねーよ。そう、ここが小説家になろうだ」

「で、何ができるの？あ、ここにあるのってもしかして小説？これ、タダで読めんの？」

「うむ、ここはだな、主に『小説を書きたいな』『小説を読みたいな』っていう一般のユーザが集う小説投稿、閲覧サイトなんだ。ちなみに現段階では無料」

「へぇー」

「ちなみに小説投稿サイトとしてはそれなりにでかい部類の規模だから、ここで小説を投稿すりゃあ誰かは見てくれるだろう」

「なるほど、下手な鉄砲数打ちゃ当たる、だね。わかった、登録ってどうやるの」

「何か微妙に表現が違う気がするな。まぁいいや、登録は画面の上の方に『ユーザ登録』っていうリンクがあるから、それをクｒ・・・・選択しろ」

「くりっくー」

「ここに変態が居ます！」

「あ、何かお前のメールアドレスをさっさと教えな、べいびーだってさ。私、パソコンのメールアドレスなんて持ってないよ」

「どんな訳の仕方だよ。別にパソコンのメールアドレスじゃなくてもイケるんだが、今回は俺の全く使ってないメールアドレスをやるよ」

「んー、携帯のアドレスでもオッケーなの？と言うかパソコンって複数のアドレス持てるんだね」

「携帯でユーザ登録の時は携帯アドレスを使えばいい。まぁそこらへんは、また教えてやるから。あまり複数のアドレスを持ちすぎるのも良くないんだがな。そこらへんは後書きで補足してくれるだろ」

「ん？誰が？」

「ほい、このアドレスを使え」

「あ、はい。カタカタカタッと。ねぇ、この利用規約ってやつは？」

「ああ、開いてみな」

「うわっ、なにこれ。日本国憲法？」

「違う違う。こういう誰でも利用できるサイトにはな、そのサイトのルールってのが定められてるんだよ。ルールブックみたいなもん」

「へぇー、小説家になろう国憲法か」

「お前、今俺がルールブックっつっただろうが」

「一緒でしょ。うへぇー、難しそうな言葉ばかりで目が腐るよ」

「違うな、お前が腐ってんだよ。まぁ、慣れるまでは俺が付いてるから後で読め。本当は今読むべきなんだがな」

「ほいほい、エンターっと」

「――で、だ。このメールアドレス宛てに何か来ただろ？」

「あ、うん。来てるね。このメールの中のリンクにアクセスしたらいいの？」

「そうそう。それで、ユーザ登録にアクセスできる」

「ねぇ、このユーザネームって？仮の名前みたいなもの？」

「そうだな、なろう内で実際に使えるお前の名前だな」

「ふむふむ、何かワクワクするね。なぁーんにしようかなぁー。可愛いのがいいかなぁ、カッコいいのがいいかなぁー。えへへへ」

「・・・・うん、まぁ決まったら言ってくれ。何か長くなりそうだから俺ベッドで横になるわ」

「えー、一緒に考えてくれるんじゃないの？」

「よっこいせっと。何でお前の名前を俺が考えるんだよ、それはお前自身なんだから自分で考えろ」

「なんかピンクベッド愛好家にもっともらしい事言われたっ」

「――で、決まった？」

「うん、一応決まったよ。で、この下の方にあるボタンをクリックしたらいいんだよね」

「ああ、登録確認ボタンな。って、酷いユーザネームだな。何？お前そんなに凄いの？強いの？」

「え、ちょー良くない？これでも会心の出来なんだよ。ほあたー！」

「ちょー良くない。まぁ後で色々変えれるからいいか。とりあえず、これでいつでも小説を投稿できるな」

「やったね、今日から私も小説家だね」

「ああ、小説家（笑）だな」

「――それで？どんな作品を書きたいんだ？やっぱり女子高生らしく恋愛ものとかなのか？」

「えっとね、こうヒロインがいて、彼氏がいて、それでヒロインが高校生で、でも可愛くて、こう、キラキラーみたいな感じでぇ――」

「・・・・・あ、もしもし親父？あんたの娘の語彙が少なすぎるんだけど、どういう教育してきたの？」

世紀末妹様あらわる（後書き）

ここまで読んで頂き、誠にありがとうございます。

さて、早速本編の補足を行わせて頂きます。

まず登録メールアドレスですが

打ち間違えの無い事が前提となりますが、『１１１＊＊２２@～～．ｊｐ』のように、@より手前に記号が続けて並んでいますが・・・・

なろう様では、この様な形式のメールアドレスは登録時に

『不正な形式のメールアドレスです』みたいなエラーが出て登録が行えません。理由は・・・ｆｏｒ　ｇｏｔ　忘れました。

また、もちろん登録済みメールアドレスを使用されても、登録済みです　とエラー表示されますのでご注意下さい。

携帯等、アドレス変更が容易でしたら変更をオススメ致します。

また、メール認証に成功致しましたら、使用されましたアドレスに登録ページへのリンクメールが受信されているかと思います。

この時、ｙａｈｏｏ様だけに限った事ではございませんが、ブラウザメールボックスをご使用の際、メールに記述されておりますリンクを選択致しますと、正常に登録ページにアクセスできません。

その為、少々手間かとは思いますがアドレスをコピーし、直接ブラウザのＵＲＬ欄に張り付けてアクセスして頂きますと問題なく登録ページに辿り着けるかと思います。

また、作中に兄様がご自身のメールアドレスを妹様に譲渡（？）さ

れていますが・・・
あまりオススメ致しません。それはまた、後日に触れたいかと思います。

やった！やっと利用規約の話に行ける！

はい、作中に兄様も仰ってますように、登録時は必ず利用規約を読まれることをオススメ致します。いや、読みましょう。

ここで兄様が無理にでも利用規約を読ませなかった事で、後に大変な出来事が起こることになりますが・・・また、後々の話で触れて行きます。

普段何でも無い事だと思っていても、知らぬ間に規約に違反している行為があったりします。
私も、この発言がブーメランに成らぬように気を付けて行こうと思います。

やった！終わった！
第二部　完

と言う事で、これ後書きか？本編じゃねえの？と疑いたくなる長さを書き上げましたが、全ては私の文才不足の致すところでございます。
極力、本編でカバー・・・できるかしら？

兄様「騒音対策バッチリです」（前書き）

ユーザネーム：世紀末妹様
フリガナ：セイキマツイモウトサマ
性別：女性
生年月日：秘密

以下、未記入

兄様「騒音対策バッチリです」

「さて、無事ユーザ登録も終わった所で、まずは何でも良いから書いてみようか」

「でね、最後にはちょー感動のクライマックスが迫ってるんだけど、ヒロインは生死をさ迷う彼氏の心の中にダイブしてね――」

「あー、トリップしてるところ悪いんだが、話進めてもいいかな」

「あ、え？何？まだ第一章なんだけど」

「第一章にいきなりクライマックスかよ！そうじゃなくてな、いい加減なろうの使い方に移りたいんだけど」

「あ、うん。わかった」

「うし、じゃあまずはユーザページに入ろうか」

「ユーザページ？」

「平たくいやあお前だけの書斎だよ。アトリエとも言う」

「わ、なんかいきなりカッコいいね。小説家って感じ」

「まぁ、誰もそんな名前で呼んでないんだけどな」

「うん？何か言った？」

「よーし、世紀末妹様の書斎にアクセスできたな？」

「え、あ、うん。何か色々あるけど・・・この新規小説作成でいいのかな」

「おう、それで良い。その他色々はまた教えるよ。一度に何個も覚えられないもんなー、お前は。」

「え、えへへ。それほどでも・・・ないよ」

「何で褒められてもいないのに照れるんだお前は・・・くねくねすんな。後、できる限りは自分で調べてみたりしような。本当に全部が全部教えてもらうだけじゃ、小説もそうだが本当の意味で上達はできんからな」

「もうっ、くねくねなんてしてないよっ！もじもじしてるんだよっ！」

「いや、変わらんだろ・・・・まぁいい、続けるぞ」

「――と言う訳で、新規小説作成ページは言葉通りに新たに小説を作る為のページだな。ここで執筆した内容は、一度『執筆中小説』として保存されるから、続きを書きたい場合は『執筆中小説』と言うページがあるから、そこから続きを書ける。また、小説を書きた

いが全体の構成がまとまって無い場合でも、草案を書き込んでメモ変わりにもできるな」

「・・・・あれ？」

「ん、なんだ。どうした、まさか今までの話を聞いてなかったのか」

「え、だって・・・・あたし話聞いてたよ？聞いてたんだけど・・・・何でいきなり要約って言うか締めに入ってんの？」

「いや、そうでもしないとみんなが読むの疲れるだろ」

「は？お兄何いってんの？みんなって誰？頭大丈夫？」

「何かお前に言われると腹立つな・・・・・そうそう、お前ちょっとおっきな声だしてみろよ。」

「へ、なんで？」

「いいからいいから。」

「う、うん・・・・？じゃあいくよ」

「―すぅ・・・いやぁぁぁ、襲われるぅぅぅうっ！！！」

「おまっ、よりにもよって何て事言うんだよ馬鹿野郎！！しかも体を抱き締めながらとか、雰囲気出してんじゃねーよ！！」

「だって、こういうシチューエーションでも無いとでないよ。で、これがどうしたの」

「うん、まぁそういう時はいいけどさ・・・・大きな声を出して、何かおかしいと思わなかったか？」

「え？・・・・あ、文字のサイズがそのまま！あれ、文字のサイズ？」

「そう、通常小説内では漫画みたいに吹き出しや文字の大きさは変わらない。これはなろうにも言える事だが、そういう機能は備わってないんだ」

「ねぇねぇ、お兄。小説の中では大きな声を出しても文字のサイズが変わらないのはわかったけどさ。これ、小説じゃないんでしょ？」

「お前は何を言ってるんだ、小説じゃないに決まってるだろ。リアルに生きろ」

「・・・・うん・・・・おっかしいなぁ・・・？」

「まぁお前には縁（えん）のない事だろうから、心配するな」

「あれ、それって緑（みどり）って読むんじゃないの？」

「よくみろよ、字が違うだろ。って言うかお前ルビの使い方知ってるんだな」

「ルビってなぁに？宝石？」

「お前無意識に使ってたのか、ある意味凄いな。ルビって言うのはだな、難しい漢字とか読めない人の為の補助機能って言うか・・・・ふりがなみたいなもんだな」

「あ、漫画とかだとほとんどあるよね。読めるっちゅーの。バカにしないでほしいよね」

「ほぉ、じゃあ『雰囲気』は読めるか？」

「ふいんきー」

「はい、バカ認定な。雰囲気（ふんいき）だバカ」

「え、そうなの？・・・・ルビさいこー！」

「はいはい・・・・使い方としては、ルビを振りたい文字の手前に『|』の記号を書くんだ。英数字の『i』や『L』や『1』と間違えないように。」

「ふむふむ、小文字のエルに一番似てるね。」

「そうそう『l』な。で、その文字の後に『《』と『》』の記号で読ませたいふりがなを挟めば完成だな」

「恋の隠し味（バニラエッセンス）」

「やべえ、この妹まじ意味わかんねぇ。まぁそうだな、そういう使い方もありだな」

「あは、何か面白いねルビって」

「ただな、このルビ機能ってのはＦｉｒｅｆｏｘや携帯では使えないんだよ。残念な事に、これは仕様だ」

「え、じゃあ青いやつでしか見れないの？」

「Ｉｎｔｅｒｎｅｔ　Ｅｘｐｒｏｌｅｒな。それと、縦書きＰＤＦだけだな」

「え、なにそれ。ぴーでぃーえふ？」

「それについてはまた今度な」

「また今度ぉ～？お兄、そんなことばかり言ってるとモテないよ。今教えてよ」

「俺がモテないわけがない。お前の為に順序立てて説明してやってるんだよ。少しは我慢しろ」

「やだ・・・・お前の為に、だなんて・・・・・惚れてまうやろ」

「何キャラだよ、そして沸点低い上に兄妹だし。まぁ、俺に惚れるのも無理ないか・・・なんせ聡明だしな」

「禁断の愛だね！そんであんまり調子のんない方がいいよ？モテな

いんだから」

「うん、ちょっとこっちに来い。その頭をひっぱたいてやるから」

「やだ、お兄ってSなんだ」

「うん、ひっぱたくだけじゃやっぱり足りんな。その能天気な頭も矯正してやる」

「やだ、その上調教なんて・・・・モテないわけだね。でも良いのかな、あたしが叫んだらご近所さんに、お兄が変態調教サディスティッカーなのがばれちゃうよ？」

「変態でもサディスティッカーでもねぇよ。好きにしろ」

「ふん、お兄の人生はここで幕を閉じることになるんだからねっ」

「いやぁぁぁ、おかされっ・・て、ああ！！しまった、何か今はおっきな声が出せないんだっ！！」

「・・・・お前、やっぱ阿呆だな。」

兄様「騒音対策バッチリです」（後書き）

ここまで読んで頂きまして誠にありがとうございます。
裏海江田です。

妹様が大声を出されてましたが、兄様の部屋は騒音対策バッチリとの事でご近所様に迷惑がかからなくてよかったですね。

今回、この2人は恐ろしい事にパソコンを一切触らずにおしゃべりされてただけなんですが・・・・
おしゃべり中でも、ルビが振れたり見れたりするんですね、驚きました。私も使ってみたいと思います。

今だっ！
私は右手に持ったそれを、奴の鼻先へと突き立て・・・・
副流煙（ふくりゅうえん）！！
必殺の一撃を放った

ふぅ、叫んでみると必殺技みたいに聞こえますね。
やってることは最低ですね、喫煙はマナーを守りましょう。
そして、厨二乙

後書きでルビが有効かどうかは検証を行っていませんので、どういう結果が待ち受けるのかドキドキです。
さて、この作品のコンセプトは『なろうの歩き方』と明言させて頂きましたが、このままですと確実に迷子ですね。いえ、もしかしたら今現在、既に迷子になって最寄の交番辺りを涙目になりながらも探し回っているかもしれませんね。

極力、コンセプトを第一に軌道を確保していき、偶にぶらりと食べ歩きしていければいいですね。

それでは、長文・厨文・乱文、失礼致しました。

追記：誤字修正致しました。

パスワードを忘れてなろうに入れません><（前書き）

前回は妹様のユーザ登録情報に前書きから追い出されました、裏海江田です。

前回、小説の執筆機能について触れましたが、まだまだ色んな機能が備わっております。
正直、作中で全てに触れられる自信がからっきしございませんので、小説家になろう様のヘルプを御覧になられる方が当作品を読まれるより遥かに解りやすく、時間を無意にすることもございません。

暗ぇよ・・・・それでは、本編をどうぞっ

パスワードを忘れてなろうに入れません><

「妹様が大変だよ、お兄！」

「・・・・うん、いいから人の部屋に入る時はノックしような？それで、何が大変なんだ」

「兄妹なんだからいいじゃん、別に。あたしならともかく、お兄の着替えシーンとか需要ないんだし」

「確かに需要があっても困るけどさ、こう・・・・・な？色々あんだろ？」

「それでね、とっても大変なんだよ、妹様が」

「よくわからないからってスルーしたな、こいつ。で、妹様って世紀末の方か？」

「そう、そうなんだよ。実はね、この前教えてもらった執筆機能を使って早速小説でも書こうかなぁーって思ったら、なろうに入れないんだよ。・・・・・パスワード忘れちゃって」

「・・・・お前、この前っていうか昨日の出来事だぞ」

「いや、その・・・・・ね？一杯教えてもらったから溢れちゃって。脳から」

「一杯って、大したこと教えてないじゃん。どんなお猪口脳だよ」

「あ、お兄、読めないよそれじゃあ。ルビ振ってよ」

「おーちょーこ！わざわざルビを振らせるな・・・・で、俺に聞きにきた、と」

「うん、それに居間のパソコンって、お母さんのソリティア機だから長い間使ってられないんだよね」

「いや、俺のも俺専用機なんですけれど」

「で、どうしたらいいのかな？新しく世紀末妹様2を作らないといけないのかな？」

「世紀末妹様っていうネーミングは譲れないのかよ・・・・いや、新しく作る必要なんてないぞ。ちょっと、なろうに繋げ」

「繋いだ」

「はやっ！？よし、まずはログインのページに行け」

「ほい」

「そんでだ、ログインページのログインボタンのちょい下に、『パスワードを忘れた方へ』的なリンクがあるだろう、そこでパスワード再発行できる」

「あ、こんなとこにあったんだ。ログインできないのに夢中で気づかなかったよ。で、このページのボックスって所にメールアドレスを入れたらいいんだよね」

「そうそう。すると、そのメールアドレス宛てに自分のアカウントのパスワード再発行ページＵＲＬが送られてくるから、そこで新たにパスワードを設定し直す事ができる。今度は忘れないようにな」

「なるほどなるほっ、わかりやすい奴がいいよね」

「そうそう。ただ、余りにも簡単なのはやめろよ。誕生日とか携帯番号の一部とか、０が４つとか」

「・・・・え？やだなぁ、そんなのにするわけないじゃん・・・・じゃん」

「分かり易すぎだろ、お前。後、全角ひらがなとかはできないから、ちゃんと半角英数字でな」

「よし、けってい。これで、ログインできるよねっ」

「あぁ。後、ログインの時はメールアドレスじゃなくてユーザＩＤでもできるから、長すぎるメールアドレスの場合はユーザＩＤのが楽だったりするんで、参考程度に」

「へぇ、そうなんだ。あ、やったぁ。ちゃんと入れたよお兄ぃ！」

「鬼だなんて・・・・俺、お前に何かしたか？」

「よーし、頑張って小説かくよぉー！」

「珍しくボケてみたら無視とか、お前俺をバカにしてんの？そうそう、ついでにユーザ情報編集でもしてみようぜ」

「え、あれボケだったの？ユーザ情報編集ってなぁに？」

「うん、もういいんだ、もう。それよりだ、ユーザトップの右側に『ユーザ情報編集』ってのがあるだろ、そこだ」

「いや、そういうことじゃなくてさ、何ができんの？」

「あーそうか、悪い悪い。お前相手だと言葉通りの意味にとっちゃダメだったな、語彙がなかったんだよな、ごめんな、お前の事しっかり考えて説明してやるからな？」

「あ、なるほど。ここで登録の時にいれた情報が編集できるんだね。あっ、自己紹介なんてのもあるんだっ！」

「お前はとんでもない悪女だな！兄がこんなにも妹の事を思ってると言うのによ！」

「お兄が勝手に暴走して変な事話だしたから、無視するしかないんです！しかもかなり失礼な事言ってたでしょ」

「ユーザ情報編集では登録時に設定できなかった項目が編集できるんだ」

「今度はあたしをスルーとか・・・・」

「そうそう、この機会にお前の携帯アドレスも入力しておくといいよ」

「うん？ケータイのアドレスって登録したらどうなるの？」

「携帯からでもログインできる・・・・いや、正確にはユーザＩＤやメールアドレス、パスワードが間違っていなければ携帯アドレスを登録しなくてもログインできるんだが・・・まぁ、携帯アドレスを登録する利点については、また追々話すよ」

「んー、わかった。ゆっくり覚えて行くよ。って言うかお兄ってめちゃくちゃなろうに詳しくない？」

「そりゃそうだろう、俺も使ってんだから」

「え、そうなの？何て名前？どんな小説かいてんの？」

「・・・・うん、また今度な。また、今度」

「何？妹に言えないものでもかいてんの？やっらしー、むっつりぃー」

「いや、やらしいとかいいから。今更だけどさ、こう言うのって、あまり家族に見られたくなかったりしないか？」

「うーん・・・・そう？あんまり考えた事ないかなぁ。と言うよりも、一応あたしって頭が良い方じゃないから、そこは間違ってるよとか教えてもらえる方が嬉しい・・・かな？・・・・これって、変？」

「変なのは今に越した事じゃないけどな。いや、実際偉いなお前。俺より向上心あるんじゃないか？ちょっと見習おうって本気で思った」

「えへ、お兄に褒められちゃった。じゃあさ、お兄のユーザネームと小説教えてよ」

「さ、そろそろ突然外出したくなるような気がしてきたから、出掛けてくるなっ！」

「とんだムッツリがここに居ます！！」

パスワードを忘れてなろうに入れません><（後書き）

前書きで書いた事ですが、一話目でやれって話ですね、裏海江田です。

今回は妹様がパスワードを忘れられたという事で、パスワードの再発行を行われていましたね。
ここで、二話にて私が後書きで述べた話になりますが、パスワード再発行においてもｙａｈｏｏ様等のメールをブラウザを利用されてますと、送信されましたＵＲＬに正しくアクセスできない事象がございますので、ＵＲＬをコピーしてアクセス致しますと正常にパスワード再発行ページへと辿り着けます。

最近、兄様妹様の性格の把握が困難になってきました。二人とも、私の手を離れ勝手にウロウロし出してます。作者の構成力等が不足している証拠ですね、精進いたします。

それでは、前書き後書きとまたも長くなりましたが失礼いたします。

夜更かしは美容の大敵ですって妹様（前書き）

今回は、妹様が初めて小説家になろうに投稿されるようです。

夜更かしは美容の大敵ですって妹様

「――なぁ」

カタカタカタカタ・・・・

「なぁって」

カタ・・・・カタカタカタ

「おい、無視すんなよ」

「もぉ～なぁに？今、ちょ～忙しいの」

カタカタカタカタカタカタカタ

「いや、あのさ、ここ俺の部屋なんだよ」

「何いってんの、そうに決まってるじゃん」

「だよな、じゃあ帰ってくんない？」

「ダメ」

カタカタカタカタ――

「・・・・なぁ、いい加減明日にしてくんない？俺、朝イチで講義があるんだけど」

「奇遇だね、あたしも明日朝練があるよ」

「明日って言うか今日なんだけどな・・・・何？夜中に突然部屋の主を叩き起こした挙げ句、寝かせてくれないとか何の拷問だよ」

「だってしょうがないじゃん、思いついちゃったんだから」

「いや、だから明日にしようぜ？って言ってんの。その時その時の思い付きも、それは素晴らしい事だと思うんだよ。ただな、後々思い返したり読み返した時に、何であの時こういう表現ができなかったんだろう、こうしたらもっと面白くできたのに・・・・なんてことが多々あると思うんだよ。だからさ、紙にメモでもして寝ようぜ？それでみんな平和になれるんだからさ。」

「え、何？聞いてなかった」

「帰れお前！！」

「できたぁー！」

「んぁ・・・・何？やっと本気の眠りにつけるの？電気つけたまんまの睡眠とか確実に疲れとれないから嫌なんだよね、俺。」

「ふふふ、会心の出来ね。どうしよう、これで出版社にでも目が止まったらどうしよう！」

「うん、そうだな、会心の出来だよな。ワクワクするよな。ついでに、兄にした諸行についても改心してくれよな。後、もうじき早朝の新聞配達さんが来る時間だから静かにしような」

「あー、どうしよぉー・・・・そうだ、サインの練習とかやっといた方がいいかなっ！？」

「そうだな、人の話しも聞けるようになった方が良いよな。うん、じゃあワクワクをそのままに寝ような。夜更かしは美容の大敵だもんな」

「え、何言ってるのお兄」

「へ？」

「今から投稿するんだから、手伝ってよね」

「ははっ、笑えねーよそれ。・・・・うん、マジで笑えねぇよ。泣けるけど」

「はい、コーヒー」

「おぅ、ありがとう。やっぱ眠気にはコーヒーだよな」

「あたしは牛乳派かな。こう、冷たいキンキンのをくぅーっと胃に流し込むのがなんとも言えないかも」

「ほぅ、胃に悪そうだな、それ。で、マジでやんの？こう、このままコーヒー飲んでお疲れ様って具合にはならないの？」

「この、執筆中小説から投稿したい小説を選べばいいんだよね」

「なんだよお前、予習完璧じゃん。俺がいなくてもやってけるよ、もっと自信持とうよ」

「で、投稿ボタンをクリックすると投稿画面に行くんだよね。何て言うのかな、大体何かわかってきたよ」

「俺は、お前が何をどうやったら理解してくれるのかわからないよ」

「えっと、小説タイトルはこれでよし。ねぇ、この短編小説と連載小説っていうのはどうしたらいいの？」

「ああ、そのお前が今書いた小説って続き物か？」

「続きものって？」

「続編があるか、その話で完結しているかなんだけどな、短編小説だと次話投稿ができないんだが――」

「要するに、短編小説は読み切りみたいなものなのかね？」

「なにその喋り方。そうそう、連載小説はそのまんま、連載していくかどうかって所だな。それ、後で変えたくても変えられないから慎重にな」

「そうなんだ。じゃあ短編小説でオッケーだね」

「あれ、前に妄想しまくっていたシリーズものの小説はどうしたんだ。やめたのか？」

「ふふふ・・・・あれは、まだ期が熟してないんだよ・・・・書きたいのはやまやまなんだけれどね、まだあたしじゃあの子を上手く操れないのさっ」

「・・・・つまり、文才が足りないのに自分でも気付いたと言うわけか。だよな、やっぱりいきなり魔王とか相手にするより、ちまちまと雑魚と闘って経験値積むべきだよな、偉いぞ。偉いついでに、もうおやすみ。勇者にも休息は必要だって」

「雑魚なんかじゃないよ。例えるならこれは、魔王を倒したと思ったら大魔王が居ましたって言うくらいの秀作だよっ」

「いきなりチート使ってんじゃねーよ！まだ回復魔法も覚えてない俺に謝れよ！」

「あ、この年齢制限って何？もしかして小説家になろうって、えっちぃ小説もあるの？あらやだっ」

「口元に手を当てニヤニヤすんな気持ち悪い。そう、小説家になろうでは、アダルトな作品も投稿できる。後は、二次創作作品だな」

「アダルトなんて、おっとなぁー！にじそうさくって？」

「二次創作。原作を元にして、自分オリジナルのストーリーを展開した作品の事だな。後、アダルト作品は１８歳以上になってから。ちなみにお酒と煙草は２０歳以上からな。これ地味に忘れるっていうか、聞かれたら『あれ、どっちだっけ？』って一瞬考えねえ？」

「お兄、なんか饒舌になってきたね」

「ああ、なんかコーヒーが効いてきたのかもな。とりあえず二次創作については、例の通り今度な」

「コーヒーぱねぇー。じゃあ年齢制限無しだね。あらすじって？」

「簡潔に本文の触りをまとめたもんだな。アニメとかで、前回のあらすじとかやってるだろ」

「ああ、なるほどね。前書きと後書きも同じ感じかな？」

「そうだな、まぁ前書きや後書きを書かない人も多いから、そこまで拘る事でもないかな。ただ、あらすじはしっかり書いた方がいいかもな。このサイトで読者が最初に目に付くのは、小説タイトルとあらすじだからな」

「それは、良いことを聞いたわ・・・・この、あたしの、あらすじで、一本釣りを、してあげるわっ！」

「いや、釣るなよ・・・・」

「ジャンルっていうのは、小説のジャンルのことでいいんだよね。

れ・ん・あ・いっと・・・・・あれ、キーワードって？警告タグって？」

「何て言うのかな、ヘルプとかマニュアルとか、色々読めばわかると思うんだけどな・・・読まないんだよな、この子ったら・・・・警告タグとは『Ｒ－１５』『ボーイズラブ』『ガールズラブ』『残酷な描写あり』これらの要素が作品内に含まれてる場合、読みたくない人もいるから付けて下さいってヤツだな。キーワードも、ニュアンスは一緒かな。これらもあらすじ同様、一番目に付く所だ。作品検索にも使われるからな」

「ながっ！説明ながっ！」

「しょうがないだろ、喋ってる俺も大変だったんだよ」

「うん、まぁ、なんとなくわかりました」

「本当にわかったのか？まぁいいや」

「あ、予約投稿って」

「もう読め！そこまでいったら説明しっかり読め！ちゃんと書いてるから！」

「・・・・はい」

「よし、もぅ投稿についてはオッケーだな、寝ていいよな！」
「と言っても、外が明るいけれどね。もぅ朝の６時だよ」
「寝れる・・・・まだ一時間は寝れる筈だ」
「目が覚めたんじゃないの？」
「・・・・うん」
「じゃ、頑張ってね。あたし朝練行くからお風呂入ってくる」
「え、何？お前、寝ずに行くの？なにそれ、何でそんなに若いの？」
「あ、あたし学校から帰ってきてからほとんど寝てたから大丈夫だよ？」

「・・・・なにそれ、俺今日バイトもあるんですけれど」
「じゃ、おやすみお兄」
「え、待って待って。ごめん、何か色々釈然としないんだけど――っていねぇし！！」

夜更かしは美容の大敵ですって妹様（後書き）

夜更かしって、年々しんどくなりますよね。私は、夜中２時が限界です。
そして、珍しく前書きが短くなってしまいました裏海江田です。

作中でも兄様が仰っておりますように、小説投稿時は前書き＆後書きは必ずしも必要と言う訳ではございません。
あまりにも長い前書き＆後書きですと、読む前に疲れてしまう方も多いですので、みなさんも気をつけましょう。
また、前書きや後書きをプロローグやエピローグ変わりとして使用されてる方もおられます。
用途は万能ですね、素晴らしい。

警告タグにつきましては、正直本気で話すと原稿用紙３０枚くらいかかると思いますので、かなり割愛させて頂きました。
主に、Ｒ－１５や年齢制限ありの作品のレーティングについてですね。
その点につきましては、小説家になろう様のガイドライン及びヘルプ、各種マニュアル、利用規約等をしっかり熟読された上で利用されることをオススメいたします。

私も全然わかっていない事ばかりですからね・・・・一人のしがない駄文製作者ですので

そして今更ですが、今回はオチと呼べるものもございませんでした。
と言うより、携帯で書きますと前後の兄様妹様のテンションがおかしくね？
と言う事が頻発している気がしますが、あくまで気がするだけです

ので、気がするだけでしょう

それでは、長くなりましたが失礼いたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5224y/

妹が『小説家になろう』で小説家になるようです

2011年11月25日23時56分発行